インスタント・メッセンジャーへの依存と社会的スキルの関係に関する考察

東北工業大学大学院　学生会員　○成田　真也
東北工業大学　正会員　中井　周作
東北工業大学　正会員　菊池　輝

1. はじめに

近年，LINE をはじめとするインスタント・メッセンジャー（以降，IM）によるコミュニケーションが若者にとって欠かせないものとなっている．若年層のソーシャルメディアの利用率が高くなっている背景には，スマートフォンの普及によりアプリなどで手軽に操作することができるという利便性の高さがある．その一方で，他人と空間を共有する公共空間内において，私的通信空間を所有するというダブル・リアリティの問題も指摘されている．公私空間の差別化が曖昧になると，「多様な人々が交流する」という公共空間が備えるべき意味が変容してしまうだけでなく，公共意識の低下から，公共事業への賛否意識にも少なからず影響を及ぼす可能性があろう．以上の認識のもと，本研究では，IM への依存性（以降，IM 依存）と個々が持つ社会性・社会的スキル（以降，社会性）を，探査的に因果関係を分析することを目的とする．

2. 測定尺度

IM 依存と社会性の因果関係を直接的に論じた研究はこれまでになされていないが，IM を含むインターネット依存に関する研究[1)]は多く存在する．本研究では既存のインターネット依存傾向尺度，社会性に関する尺度を参照し，次の尺度を測定することとした．

<u>IM 依存尺度</u>

- IM 利用依存（瀧[2)] の研究成果に加え，日常生活の中で，無意識下で IM を利用する程度を測定する項目を付加した.）
- IM 効用認知（携帯メールの利便性認知尺度[3)] を IM 版として編集する.）
- 友人関係（吉岡[4)] の研究をもとに，日常生活の様々な交友場面を，対人関係に求めるか，IM 関係に求めるかを測定する尺度として編集する.）

<u>社会性尺度</u>

- KISS-18（菊池[5)] が開発した社会的スキルを測定する尺度.）
- 情動知能[6)]（感情知能を測定するものであり，自己や他者の感情を知覚し，また自分の感情をコントロールする知能を指す.）
- 対人コミュニケーション・スキル[7)]（コミュニケーションを適切に行う技能を測定する尺度.）

3. 方法

探索的に因果仮説を措定するために，同一調査協力者に対する縦断調査（パネル・アンケート）を実施した．Wave-1 を調査 1 回目，Wave-2 を調査 2 回目とする．Wave-1，2 ともに同一調査票となっており，両調査の間隔は 1 ヶ月以上確保した．質問項目は，**表 1** に示した尺度である．なお，以降の分析では，Wave-1，2 ともに回答した調査協力者のデータのみを用いる（合計 93 名うち男性 88 名，女性 5 名）．

キーワード　公共意識　社会的スキル　コミュニケーション

連絡先　〒982-8577　仙台市太白区八木山香澄町 35-1　東北工業大学大学院土木工学専攻　TEL022-305-3517

IM 依存と社会性の因果関係を示す先行事例がないため，交差遅れ効果モデルを適用して，探索的に要因間の因果関係を分析する. このモデルは, 二つの変数を異なる時点（Wave-1 と Wave-2）で組み合わせることで，変数間に優位な関連があった場合，単なる相関ではなく片方から他方への因果的な影響として捉えることができる分析手法である．本研究では Wave-2 時点の IM 依存と社会性それぞれを目的変数とする重回帰分析で**図 1** におけるパス A と B の値を求め，A か B 片方のみ有意な場合は一方向的な，両方有意な場合は双方向的な影響があるとみなす.

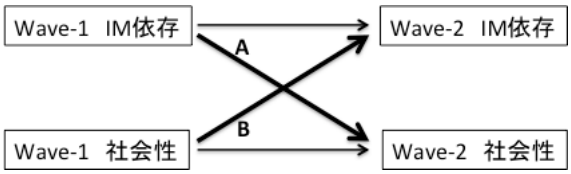

図 1　交差遅れ効果モデル

4. 結果

4.1 調査項目の妥当性

測定した尺度の信頼性係数を**表 1** に示す．IM 効用認知において 0.8 を下回ったが，概ね一つの尺度として集約可能と判断した．よって，因果関係の分析にあたっては，尺度ごとに質問項目の平均値を変数値として扱う.

表 1　各尺度の信頼性係数

尺度	Wave−1	Wave−2
IM利用依存	α=0.857	α=0.903
IM効用認知	α=0.781	α=0.782
友人関係	α=0.905	α=0.906
KISS−18	α=0.860	α=0.883
情動知能	α=0.892	α=0.887
対人ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ･ｽｷﾙ	α=0.832	α=0.866

4.2　因果関係の分析

IM 依存のどの尺度が，社会性のどの尺度と，どのような関わりがあるのか，3 つの IM 依存と 3 つの社会性の関連を交差遅れ効果モデルから検証した．その結果を**表 2** に示す．パス AB ともに有意となるものはなく，何らかの因果関係を推察することができる．まず，パス A のみが有意（含有意傾向）となったものは，IM 利用依存から情動知能への負の影響，友人関係から情動知能への負の影響であった．一方，パス B のみが有意となったものは，情動知能および対人コミュニケーション・スキルから IM 効用認知への正の影響であった．この結果を図化すると**図 2** のようになる.

表 2　IM 依存と社会性の関係

IM依存	社会性	パスAの標準化係数	パスBの標準化係数
IM利用依存	KISS−18	0.006	0.114
	情動知能	−0.125 *	0.067
	対人ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ･ｽｷﾙ	−0.034	0.093
IM効用認知	KISS−18	0.048	−0.012
	情動知能	−0.112	0.235 **
	対人ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ･ｽｷﾙ	0.109	0.256 **
友人関係	KISS−18	−0.024	0.092
	情動知能	−0.174 **	0.086
	対人ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ･ｽｷﾙ	−0.062	0.09

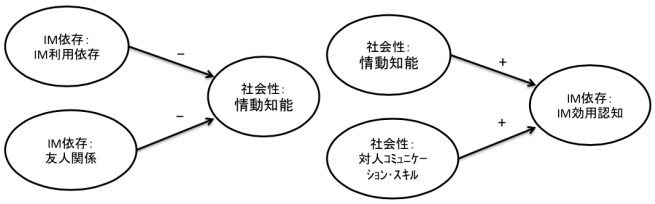

図 2　IM 依存と社会性の因果関係

5. まとめ

分析の結果，IM 依存と社会性には相互関係があることが分かった．日常的な交友関係を，対人付き合いよりも IM での付き合いに求めるほど，また IM への利用依存が進行するほど情動知能は低下，すなわち，自己の感情をコントロールすることが難しくなることが分かった．しかし一方で，情動知能や対人コミュニケーション・スキルが身についている人は，IM を適切に活用できる可能性を示唆する結果となった.

参考文献

1) Young, K.S. (1998) Caught in the Net: How to recognize the signs of Internet addiction and a winning strategy for recovery. New York, NY: John Wiley & Sons.

2) 瀧一世，インターネット依存とその測定について～インターネット依存尺度作成の試み～，奈良大学大学院研究年報，第 18 号，2013.

3) 五十嵐祐，吉田俊和，大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響，心理学研究 第 74 巻 第 4 号，2003.

4) 吉岡和子，友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感，青年心理学研究 (13)，13-30，2002-01-31.

5) 菊池章夫，KiSS-18 研究ノート，岩手県立大学社会福祉学部紀要 第 6 巻 第 2 号 ，2004.3.

6) 内山喜久雄，鳥井哲志，宇津木成介，大竹恵子，EQS マニュアル，2001，実務教育出版.

7) 藤本学，ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ･ｽｷﾙの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討，ﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ研究 2013 第 22 巻 第 2 号 156–167.